

通常の学級における低学年児童の書字学習状況とその支援課題

大庭重治*

(平成21年9月30日受付；平成21年10月29日受理)

要 旨

小学校の通常の学級には、書字の学習に困難を示す児童が少なからず在籍している。学習初期の読み書きのつまずきは、他のあらゆる学習の実現に影響を与えることから、その支援方法の開発は最も重要な課題のひとつとされている。しかしながら、特別支援教育の展開に伴い通常の学級における学習環境は大きく変化しており、現在どのような児童が通常の学級に在籍しているのか、また今後どのような支援体制の整備が期待されているのかの把握が困難な状況にある。そこで、本研究では、小学1年生及び2年生の学級担任に対するアンケート調査を通して、書字学習において特別な支援を必要としている児童の学習状況を把握し、今後の支援体制の構築において解決すべき諸課題について検討した。その結果、1) 対象となる児童の在籍率は1年生では4.5%、2年生では5.4%であり、特に平仮名と漢字の継続的な学習支援が必要であること、2) 担任に対する支援の申し出の割合が低く、そのことが諸検査が十分に実施されていないひとつの理由になっていると考えられること、3) 特に学習初期においては、筆圧、筆記用具の持ち方、板書視写などに関する配慮も必要であること、などが明らかにされた。

KEY WORDS

first and second-grade children 小学1年生及び2年生
questionnaire survey アンケート調査

learning of handwriting 書字学習
children with writing difficulties 書字困難児

問題と目的

通常の学級には特別な支援を必要とする児童が多数在籍しており、様々な学習場面においてその支援方法の開発が求められている。特に、早期の読み書きの学習は、他のあらゆる学習の実現に影響を与えることから、従来その支援方法の検討は最も重要視されるべき課題のひとつとされてきた(大庭, 1994, 1996)。通常の学級において読み書きの学習につまずく子どもたちの多くは発達性ディスレクシアと呼ばれる子どもたちであり、学習障害児の約8割を占めるといわれている(上野, 2006)。ところが、そのような子どもが目の前に現れた時、多くの教師は子どもの学習状況をどのように理解すべきかに戸惑い、適切な支援が行われないうちに時間が流れてしまう状況が生じている。このような児童の学習を促すためには、速やかに子どもの発達特性を把握すると共に、子どもが置かれている学習環境を評価し、その環境を学習支援に最大限に活用していくための手だてが必要である。

このようなことから、近年、学習につまずきを示す子どもたちの読み書きに関する研究への期待は益々高まりを示している(加藤, 2003; 石井, 2004)。これまでに、書字における認知特性については、主に認知神経心理学的な観点(宇野, 1998; 大庭, 2005)や情報処理過程の観点(石井・雲井・小池, 2003)から検討されており、運動特性については、筆圧に関する研究が散見される(大庭, 2000; 新藤・辻・正門・長谷・木村・千野, 2004)。また、様々な評価結果を支援に反映させる試みもいくつかの研究において報告されている(熊谷, 1998; 宇野・金子・春原, 2003; 石井・成・柏原・小池, 2004; 春原・宇野・金子, 2004)。一方、従来、読み書きの学習には聞き手や読者の存在が極めて重要な役割を果たしていることが指摘されてきたが(Czerniewska, 1992)、このことは特に学習につまずいている子どもたちの支援における動機づけの重要性として指摘されている(川村, 2002, 2003)。このように、多くの知見が様々な分野において蓄積されてきていることから、今後はこれらの知見を読み書きの学習支援に応用していくための作業が期待される。

しかしながら、特別支援教育の展開に伴い通常の学級における学習環境は大きく変化しており、現在どのような児童が通常の学級に在籍しているのか、また今後その子どもたちに対して、従来の知見に基づいてどのような支援体制の整備が期待されるのかの把握が困難な状況にある。

そこで、本研究では、小学校低学年の通常の学級に在籍する「書くことの学習において特別な支援を必要とする児

童（以下、要支援児童）」の学習状況を把握し、今後の支援体制の構築において解決すべき諸課題について検討することを目的とした。

方 法

1. 調査対象

新潟県上越地域にある糸魚川市、上越市、妙高市、柏崎市、刈羽村（人口合計約39万人）の全小学校112校において、第1学年及び第2学年の通常の学級を担当している教師337名（342学級）を対象とした。

2. 調査内容

1) 教師本人に関する内容

担任をしている学年、教職経験年数、特別支援教育に関する教職経験年数、所有する教員免許状、担任をしている学級の児童数、学級に在籍する書くことに関する要支援児童の人数を尋ねた。ここで対象となる「要支援児童」については、「平仮名、片仮名、漢字、数字の書字の際に、それぞれの文字を紙の上に鉛筆で表現することに何らかの困難を示す児童」とし、その特徴例をアンケート内の別の質問項目（資料1⑦参照）において列挙した。また、文章構成（作文）が困難な児童は対象とならないことを付記した。

2) 要支援児童に関する内容

質問内容を資料1に示す。該当した各児童について、性別、利き手、書くことに関連する保護者からの特別な支援の要求の有無、困難な文字の種類、発達特性、実施済みの検査、書字の状態、支援の状況を、選択肢と自由記述により尋ねた。その他の内容として、過去に実施して有効であった支援方法や今後の検討課題についても補足的に尋ねた。

3. 調査方法

5ページからなるアンケート回答用紙を作成し、学級ごとに回答を依頼した。複式学級の場合には、別の回答用紙を使用し、別の学級として回答してもらった。2009年2月中旬に、担任教師の人数分のアンケート用紙と返信用封筒を学校毎にまとめて配布した。その後、回答用紙は、約1か月の間に各教師からの郵送により個別に回収した。

結 果

1. 回収率

教師の数からみた回収率は68.8%であった。なお、回収された回答のうち、学級の児童数が記載されていないものが1件あったため分析から除外した。その結果、教師231名、233学級を分析の対象とした。

2. 教師本人について

1) 担任学年

回答者が担任していた学年は、115名が1年生、118名が2年生であり、学年毎の回答者数はほぼ同数であった。

2) 教職経験年数

教職経験年数の平均は、1年生担任が17.4年、2年生担任が15.7年であった。また、特別支援学校（盲学校、ろう学校、養護学校）、特別支援学級（特殊学級）、通級指導教室での教職経験者は、1年生担任が11名、2年生担任が19名であり、その平均年数はそれぞれ2.6年、3.9年であった。

3) 教員免許状の所有率

盲学校、聾学校、養護学校教諭免許状のいずれかを所有している教師の割合は、1年生担任が7.8%、2年生担任が7.6%であった。

4) 学級の児童数

調査対象となった教師が担任している学級の児童数の合計は、1年生が2,304名、2年生が2,421名であった。

3. 要支援児童について

1) 在籍率

1年生では4.5%（2,304名中103名）、2年生では5.4%（2,421名中130名）であった。1年生と2年生の間に有意差は認められなかった（ $\chi^2(1)=2.04$, ns）。

2) 性別

男子の割合が1年生では80.6%、2年生では73.1%であり、いずれの学年も男子の割合が有意に高かった（直接確率計算により、いずれも $p<.01$ ）。

表1 書字が困難な文字の種類 (%)

学年	平仮名	片仮名	漢字	数字
1年	85.4	84.5	94.2	29.1
2年	76.2	67.7	92.3	35.4

表2 要支援児童の発達特性 (%)

学年	LD 学習障害	ADHD 注意欠陥/ 多動性障害	PDD 広汎性 発達障害	MR 知的障害	視覚障害	その他	不明
1年	31.1	25.2	11.7	17.5	1.9	28.2	15.5
2年	33.1	21.5	8.5	11.5	2.3	21.5	23.1

表3 実施済みの検査 (%)

学年	WISC-Ⅲ	K-ABC	LDI(-R)	フロスティック	その他	未実施
1年	38.8	3.9	0	0	0	44.7
2年	36.2	2.3	1.5	2.3	1.5	53.1

表4 要支援児童にみられる書字特性 (%)

学年	字形	筆順	筆圧	持ち方	早さ	視写	記憶	動機	その他
1年	80.6	78.6	54.4	48.5	41.7	30.1	62.1	35.0	7.8
2年	80.0	76.9	38.5	36.2	36.2	15.4	62.3	43.1	10.0
字形：字形の崩れが多い		筆順：筆順の誤りが多い							
筆圧：筆圧の調整が難しい		持ち方：鉛筆を正しく持てない							
早さ：書く早さが遅い		視写：黒板の文字を書き写そうとするが書けない							
記憶：学習しても忘れやすい		動機：文字を書くことを好まない							

表5 要支援児童に対する支援の状況 (%)

学年	介助員	自校通級	自校通級 以外	他校通級	相談機関	その他	なし 不明
1年	28.2	9.7	5.8	6.8	5.8	19.4	36.9
2年	16.2	16.2	16.2	7.7	4.6	23.1	28.5

介助員：学級内での介助員（支援員）による支援

自校通級：校内の通級指導教室における支援

自校通級以外：校内の通級指導教室以外の場における支援

他校通級：他校の通級指導教室における支援

相談機関：校外の相談機関の利用

3) 利き手（ここでは、鉛筆を持つ側の手）

1年生では、右利きが73.8%、左利きが16.5%、不明が9.7%であった。また、2年生では、右利きが82.3%、左利きが10.8%、不明が6.9%であった。一般に日本人の左利きの割合は1割程度であるといわれており（坂野，1982など）、その割合と比較すると有意な差は認められなかった（ $\chi^2(1)=1.21$, ns）。

4) 保護者からの特別な支援の要求

保護者からの書くことに関する特別な支援の要求が出ている児童の割合は、1年生では33.0%、2年生では35.4%であり、いずれの学年も支援要求が出ていない割合が有意に高かった（直接確率計算により、いずれも $p<.01$ ）。

5) 困難な文字の種類

書字に困難がみられる文字の種類について、表1に該当児童の割合で示す。学年による差がみられたのは片仮名であり、1年生の割合が有意に高かった（ $\chi^2(1)=8.65$, $p<.01$ ）。平仮名と漢字は、1年生、2年生共に相対的に高い割合を示した。

6) 発達特性

発達特性について、表2に該当児童の割合で示す。診断名または該当すると思われる特性としては、半数以上の児童がLD又はADHDのいずれかに該当していた。

7) 実施済みの検査

実施済みの検査について、表3に該当児童の割合で示す。実施している場合には、ほとんどの児童がWISC-Ⅲを受けていた。一方、未実施の割合が、1年生では44.7%、2年生では53.1%であった。

8) 書字の状態

要支援児童の書字の状態について、表4に該当児童の割合で示す。1年生、2年生共に相対的に高い割合を示した内容は、字形、筆順、記憶であった。また、2年生と比べて1年生で高い傾向が見られた内容として、筆圧 ($\chi^2(1)=5.86, p<.05$)、持ち方 ($\chi^2(1)=3.63, .05<p<.10$)、黒板の視写 ($\chi^2(1)=7.28, p<.01$) があった。

9) 支援の状況

要支援児童に対して実施されている支援の内容について、表5に該当児童の割合で示す。介助員の割合は2年生に比べると1年生で有意に高かった ($\chi^2(1)=4.91, p<.05$)。逆に、校内の通級指導教室以外の場における支援である「自校通級以外」の割合が2年生になると有意に高くなっていた ($\chi^2(1)=5.98, p<.05$)。

考 察

本研究の目的は、小学校低学年の学級担任を対象としたアンケート調査を通して、書くことの学習において特別な支援を必要とする児童の学習状況を把握し、その結果から、通常の学級における今後の支援体制の構築過程において解決すべき諸課題を明らかにすることであった。

通常の学級の担任が考える書字に関する要支援児童は1年生では4.5%、2年生では5.4%であった。このことは、通常の学級の中には、小学校入学後の組織的な書字学習が実施される初期の段階から、既に特別な支援を必要としている児童が少なからず在籍していることを示している。しかしながら、担任が特別支援教育の経験者である割合は2割以下であり、また特別支援教育に関する免許状の取得率は1割にも満たない状況であった。これらの状況は必ずしも支援内容の質的低下を招く理由とはならないものの、専門性を保障するための支援連携の必要性を示唆している。

また、要支援児童において書字が困難な文字の種類をみると、平仮名、片仮名、漢字の割合が高く、特に平仮名と漢字は学習の初期から2年生になっても高い割合で特別な支援が必要であると考えられていた。ところが、このような児童において、保護者が何らかの特別な支援を要求していた割合は1年生で33.0%、2年生で35.4%であり、6割以上の保護者は2年生になっても担任に対して支援の要求を出していなかった。このことは特性把握のための諸検査の実施率が低く、いずれの検査も実施していない児童が1年生で44.7%、2年生で53.1%も存在するひとつの大きな理由になっていると考えられた。根拠に基づく支援(恵羅, 2002, 2007)を実現するためには、対象児童の認知特性の把握が不可欠である。そのためには、保護者からの困難な学習状況に関するカミングアウトが必要であり、それが容易に実現できる環境づくりが期待される。

また、要支援児童の書字学習時にみられる主な問題点は、字形の崩れが多い、筆順の誤りが多い、学習しても忘れやすいなどであった。このような問題がなぜ顕著に表れているのか、その背景を探るためにも、書字行動の詳細な観察とともに諸検査の実施が望まれる。さらに、1年生の段階では、運筆機能に関わる筆圧や筆記用具の持ち方に関する問題や、連絡帳を書く場面のような板書された文字をノートに書き写すことの困難さも指摘されており、これらの点についても特に配慮が必要である。なお、これらの児童に対して、何らかの支援がなされている割合は1年生では63.1%、2年生では71.5%であった。ただし、その他の割合にみられるように、担任による授業中の配慮などに留まっている場合も少なくなかった。また、介助員による学級内での支援の割合は1年生で高く、2年生になるとその割合は減少していた。その反面、校内の通級指導教室以外の場における支援が増えるなど、学級外に支援の場を求めていく傾向がみられた。近年の注目すべき動向として、このような子どもの個人特性のみならず、その子どもの回りにいる他の子どもとの関係(別府・清水・谷野, 2004)や教師の支援内容(小牧・田中・渡邊, 2006)など、学習支援を学習環境との関連性を重視して組織しようとする試みがなされている。各学校における実現可能性を考慮しつつ、学習が困難な子どもに対する包括的な支援体制の整備が求められているといえる。

引用文献

- 別府悦子・清水章子・谷野佳代子 2004 通常学級に在籍する広汎性発達障害児の学習困難とその対応. 障害者問題研究, 32 (2), 119-130.
- Czerniewska, P. 1992 Learning about Writing: The Early Years. Oxford: Blackwell.
- 恵羅修吉 2002 発達障害児の評価と支援：根拠に基づく教育実践に向けて. 発達支援研究, 4, 2-4.
- 恵羅修吉 2007 根拠に基づく教育実践と心理学. 上越教育大学障害児教育実践センター紀要, 13, 7-12.
- 春原則子・宇野 彰・金子真人 2004 発達性読み書き障害児に対する障害構造に即した訓練について. 発達障害研究, 26 (2), 77-84.
- 石井加代子 2004 読み書きのみの学習困難（ディスレキシア）への対応策. 科学技術動向, 45, 13-25.
- 石井麻衣・雲井未歆・小池敏英 2003 学習障害児における漢字書字の特徴. LD研究, 12(3), 333-343.
- 石井麻衣・成 基香・柏原亜津子・小池敏英 2004 軽度発達障害児における漢字書字の学習過程に関する検討. 東京学芸大学紀要 1 部門, 55, 161-171.
- 加藤醇子 2003 読み書きの言語認知神経心理学と研究の動向. LD研究, 12(3), 240-247.
- 川村秀忠 2002 学習障害児の内発的動機づけ：その支援方略を求めて. 東北大学出版会.
- 川村秀忠 2003 学習障害児の内発的動機づけを支援するために. LD研究, 12(3), 288-297.
- 小牧綾乃・田中真理・渡邊 徹 2006 通常学級に在籍する特別な教育的ニーズのある児童への担任教師による支援に関する調査研究. LD研究, 15(2), 216-224.
- 熊谷恵子 1998 筆順の不正確な注意欠陥多動障害児に対する漢字の書字指導. LD（学習障害）－研究と実践－, 7(1), 69-79.
- 大庭重治 1994 通常学級における平仮名書字指導の諸問題. 上越教育大学研究紀要, 14(1), 131-140.
- 大庭重治 1996 通常の学級に在籍する書字学習困難児の指導上の問題とその改善に関する調査研究. 特殊教育学研究, 33, 15-24.
- 大庭重治 2000 幼児における表現活動の発達と筆圧調整機能. 上越教育大学研究紀要, 19(2), 665-673.
- 大庭重治 2005 書字学習困難児の発達特性と学習支援. 上越教育大学研究紀要, 24(2), 819-828.
- 坂野 登 1982 かくれた左利きと右脳. 青木書店.
- 新藤恵一郎・辻 哲也・正門由久・長谷公隆・木村彰男・千野直一 2004 書癡患者の書字評価：簡易な筆圧計による筆圧分析の有用性の検討. リハビリテーション医学, 41(5), 296-301.
- 上野一彦 (2006) LD（学習障害）とディスレキシア（読み書き障害）. 講談社.
- 宇野 彰 1998 ADHDを伴い書字障害を呈した学習障害児. 小児の精神と神経, 38(2), 117-123.
- 宇野 彰・金子真人・春原則子 2003 学習障害児に対するバイパス法の開発. 発達障害研究, 24(4), 348-356.

付 記

本研究の実施にあたり、新潟県上越地域内の小学校の先生方より多大なるご協力を頂きました。厚く御礼申し上げます。なお、本研究の一部は平成20年度科学研究費（課題番号20530811）の助成を受けて実施した。

資料1 要支援児童に関する質問の内容

注) 回答欄は別のページに設定した。

【質問】

- ①性別：どちらかに○をお付けください。
- ②利き手：「鉛筆を持つ手」について、どちらかに○をお付けください。
- ③保護者のニーズ：「書くこと」に関連して、保護者から何らかの特別な支援を求められていますか。要求の有無について、どちらかに○をお付けください。
- ④文字種：書字が困難な文字の種類について、該当する文字すべてに○をお付けください。
- ⑤発達特性：下記の「発達特性」について、該当する特性の番号をすべてご記入ください。
明確な診断がなくても、該当すると思われる場合にはご記入ください。
- | | | |
|-------------|---------------------|---------------------|
| 1. 学習障害(LD) | 2. 注意欠陥/多動性障害(ADHD) | 3. 広汎性発達障害(PDD) |
| | | (自閉症, アスペルガー症候群等) |
| 4. 知的障害(MR) | 5. 視覚障害 | 6. その他(具体的にご記入ください) |
- ⑥実施した検査：下記の「心理検査」について、既に実施した検査の番号をすべてご記入ください。
- | | | | |
|------------|---------------------|----------------|---------|
| 1. WISC-Ⅲ | 2. K-ABC | 3. LDI (LDI-R) | 4. ITPA |
| 5. フロスティッグ | 6. その他(具体的にご記入ください) | 7. 実施検査なし | |
- ⑦書字の状態：下記の「書字の状態」について、現在該当する状態の番号をすべてご記入ください。
1. 字形の崩れが多い
 2. 筆順の誤りが多い
 3. 筆圧の調整が難しい
 4. 鉛筆を正しく持てない
 5. 書く早さが遅い
 6. 黒板の文字を書き写そうとするが書けない
 7. 学習しても忘れやすい
 8. 文字を書くことを好まない
 9. その他(具体的にご記入ください)
- ⑧支援の状況：下記の「支援の状況」について、今年度内で該当した状況の番号をすべてご記入ください。
1. 学級内での介助員(支援員)による支援
 2. 校内の通級指導教室における支援
 3. 校内の通級指導教室以外の場における支援
 4. 他校の通級指導教室における支援
 5. 校外の相談機関の利用(具体的にご記入ください)
 6. その他(具体的にご記入ください)

Learning of Handwriting in First and Second-Grade Children with Writing Difficulties and Support Problems in a Regular Class

Shigeji OHBA*

ABSTRACT

In a regular class of elementary school, some of the children show writing difficulties. The development of the supporting method of handwriting learning is one of the most important problems. However, it is difficult to understand what kind of child is in a regular class now and what system of support will be expected in the future, because the learning environment in a regular class has changed greatly along with the development of the special support education. The purpose of this study was to understand the state of learning in children with writing difficulties and to present the essential problems of support system in a regular class. First and second-grade teachers were surveyed with a questionnaire that asked about the children with writing difficulties in their class. The main results were as follows: (1) The rate of the children with writing difficulties was 4.5% in the first-grade classes and 5.4% in the second-grade classes. (2) The demand of support from their parents didn't appear strongly. This seemed like one reason why various tests were not executed enough. (3) In the early stage of study, it was necessary to consider the writing pressure, the pencil grip and copying the character of the blackboard.

KEY WORDS

first and second-grade children
questionnaire survey

learning of handwriting
children with writing difficulties

* Clinical Psychology, Health Care and Special Support Education